

共感性の個人差と感覚処理感受性との関係について

Individual Differences of Empathy and its Relationship to Sensory Processing Sensitivity

登張真穂*

Maine TOBARI

要旨：本稿では、共感性との関連が示唆されている感覚処理感受性の特徴と共感性との関係について、文献研究を基に検討し、感覚処理感受性が共感性の個人差に関連している可能性について考察することを目的とした。最初に、共感の概念と研究の歴史と動向、共感性の次元について概説した。文献によると、感覚処理感受性は、深い情報処理をする、感覚が鋭敏で刺激を受けやすく、喚起されやすい、感情が強い、抑うつや不安等の問題を抱えやすい等の特徴がある気質特性である。感覚処理感受性を測定する尺度(HSPS)も開発されている。HSPSと共感性の次元との関係を検討する研究からは、HSPSは個人的苦痛との関係が特に強いこと等が明らかとなった。感覚処理感受性の神経基盤を検討する研究からは、感覚処理感受性は共感に関連する脳領域の活性化と関連することが示された。共感性の個人差に感覚処理感受性がどのように関連するかという問題は、今後も検討すべき重要な課題だと考えられる。

キーワード：共感性、感覚処理感受性、個人的苦痛、個人差、次元

はじめに

他者の気持ちがなんとなく分かって、その気持ちを共有することを共感という。共感とは心理学のいろいろな分野で重要な概念として重視されているが、sympathy と Einfühlung という二つのルーツを持つことや、それぞれの分野の理論家や研究者が独自の解釈をして意味や使い方が変化したこともあったために、やや分かりにくい概念になってしまっている。しかし、共感とは実は、非常に身近で、よく起こる現象であり、さまざまな場面で重要な役割を果たしている。この共感を起こす傾向、特性のことを共感性、または特性共感という。共感性は基本的な人間の能力の一つであるが、誰もがいつでも共感性を同等に持っている、一様に示すというわけではなく、個人差があると考えられる。共感性の個人差を捉える測度として、いくつかの共感性尺度が開発されている。なお、近年では、共感性は複数の次元で捉えるのがよいとして、共感性の測定には多次元的な共感性尺度が用いられることが多い。

* とばり まいね 文教大学生生活科学研究所

共感性の個人差にはさまざまな要因が関連している可能性があるが、本稿では、最近注目されている感覚処理感受性という気質特性に注目する。最初に共感の概念と研究の歴史と動向について改めて概説し、よく用いられている共感性の次元について説明したうえで、感覚処理感受性の概念と特徴、測度、およびこの特性と共感性の次元との関連について、文献研究を基に検討する。そして、共感性の個人差に感覚処理感受性が関連する可能性について考察する。

共感の概念と研究の歴史と動向

共感という概念を学問的に最初に説明したのはイギリスの哲学者ヒュームである。ヒュームは、ヒトには他者の感情表出や状況に気づいて、その気持ちを想像したり、共有したりする（共感する）傾向があるとして、それは人間の本性の中でも特に注目すべき傾向であるとした（Hume, 1739/2000 石川・中釜・伊勢訳 2011, 伊勢・石川・中釜訳 2012）。ヒュームはこの傾向を sympathy という用語を用いて説明した。sympathy の概念は創成期の心理学や社会学でも用いられた（McDougal, 1908 など）。

ドイツの哲学者・心理学者のリップスはヒュームの著書をドイツに紹介したが、さらに考察を深め、共感が起こる過程について、主に美学で用いられていた Einfühlung（感情移入）という用語を用いて説明しようとした（Lipps, 1907 Cavallaro 英訳 2018）。ティッチェナーは Einfühlung を empathy と英訳し、アメリカ心理学界に紹介した（Titchener, 1909）。

共感の概念には他者との感情共有や感情的反応という感情的要素と、他者の感情を想像する・理解するという認知的要素が含まれている。empathy の概念も本来感情共有の意味も含むのだが、当初は「相手の内面を理解しようとする」という認知的側面がより重視された（Davis, 1994 菊池訳 1999）。empathy の概念は、臨床心理学の分野などを中心に用いられた。一方、感情的な共感については、1950年代まで社会心理学や発達心理学の分野では sympathy の用語を用いることが多かった（たとえば Murphy, 1937; Heider, 1958 大橋訳 1978）。

ところが、1960年代以降、社会心理学や発達心理学の分野で、empathy を「他者の感情体験に対する代理的感情反応」と定義し、この概念を用いて、共感がどのように起こるかを実験的に検討する研究（Stotland, 1969 など）や、児童の共感を測定する研究（Feshbach & Roe, 1968）が行われるようになり、この用い方が主流となっていく。この定義は、共感の感情反応としての側面を強調するもので、この内容を表す用語としては従来 sympathy が用いられることが多かったのだが、共感の感情的側面にも empathy の用語が用いられるようになり、empathy の意味範囲が広がったと言える。主な共感理論家であるホフマン（Hoffman, 1984）も、empathy の用語を用いて共感が起こる過程について述べ、さらに理論を発展させて、自他の意識の発達に伴って共感が質的に変化するという共感の発達理論、共感と道徳的感情との関係についての理論を提唱した（Hoffman, 1984, 1987, 2000 菊池・二宮訳 2001）。主要な研究者にはこのほか、バトソン、デイヴィス、アイゼンバーグがいる。

デイヴィスは、共感や共感性は複数の次元から成る多次元的概念として捉えるのがよいとして、視点取得、共感的関心、個人的苦痛、ファンタジーの4下位尺度から成る対人的反応性指標（IRI）という多次元的な特性共感（共感性）尺度を開発し（Davis, 1983）、さらに共感の関連概念間の関係を統合的に捉える組織的モデルを提唱した（Davis, 1994 菊池訳 1999）。デイヴィスの IRI は世界中で翻訳され、特性共感の次元と向社会的行動やその他の心理的変数との関係を

検討する研究や共感性の発達を検討する研究などが、パーソナリティ心理学や社会心理学、発達心理学などの分野を中心に幅広く行われている。2000年以降には、機能的核磁気共鳴造影法（fMRI）の開発などに伴い、共感が起こる際に脳のどの部位が活性化するか等を検討する神経心理学的共感研究や、動物の共感について検討する進化心理学的共感研究などが盛んになり、共感研究を行う分野が広がった。これらの分野でも、1960年代以降、社会心理学等で用いられてきたのと同様の empathy の概念が用いられている。

共感研究には、共感を実験的に引き起こして生理的指標や形容詞チェックリスト等で測定する状態共感の研究もある。神経心理学的研究も状態共感の研究と言えるが、上に言及したストットランド、フェッシュバック、バトソン、デイヴィス、アイゼンバーグらも、そうした研究を行っている（Stotland, 1969; Feshbach & Roe, 1968; Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen, 1983; Davis, Hull, Young, & Warren, 1987; Eisenberg, Fabes, Schaller, Miller, Carlo, Poulin, Shea, & Shell, 1991）。登張ら（登張, 2005; 登張・大山・木村, 2010; Tobari & Oshio, 2023）は、これらの研究とデイヴィスの組織的モデルを参考にして、状態共感の個人差を測定する測度を開発した。長年、共感研究は特性共感尺度を用いた研究が主流であったが、最近、社会心理学等の分野でも状態共感の研究も増えているようである（Hodges & Wixwatt, 2022 など）。

臨床心理学の分野でも、empathy 概念は引き続き用いられていて、共感研究も行われているが、臨床心理学におけるロジャーズやコフォートの empathy 概念と社会心理学や発達心理学等の分野で用いられている empathy 概念には大きな違いがあるために、同じ empathy という用語を用いても分野間で乖離があったかもしれない。しかし、状態共感の研究は臨床心理学の分野でも行われるようになっており、デイヴィスの IRI をもとにした臨床場面で用いる状態共感尺度なども開発されている（Johnson, Knight, & McHugh, 2021）。

共感性の次元

デイヴィスが開発した多次元的共感性の尺度 IRI を構成する 4 下位尺度のうち、視点取得尺度は、自発的に他者の視点を取ろうとする傾向を測定する認知的尺度である（Davis, 1983）。共感的関心尺度は、不運な他者に対する同情や心配など他者指向的感情を持つ傾向を測定する尺度である。最近では、sympathy は共感的関心と同義で用いられることが多く、アイゼンバーグらは共感的関心尺度を sympathy 尺度と表記して用いている（Eisenberg, Guthrie, Cumberland, Murphy, Shepard, Zhou, & Carlo, 2002 など）。個人的苦痛尺度は、緊張する対人場面で個人的不安など自己指向的な感情を持つ傾向を測定する尺度である（Davis, 1983）。共感的関心と個人的苦痛の二つの感情的尺度は、苦痛を示す他者への感情的反応を形容詞チェックリストで測定し、愛他的な共感的関心反応と自己中心的な苦痛反応を因子分析により弁別したバトソンらのグループ（Batson et al., 1983）の研究結果と対応している。

ファンタジー尺度は、本や映画や演劇の中の架空の人物に自分自身を置き換える傾向を測定する尺度で（Davis, 1983）、この尺度はストットランドらが開発したファンタジー・エンパシー尺度（Stotland, Mathews Jr., Sherman, Hasson, & Richardson, 1978）を基にしていると考えられる。ストットランドらは複数の下位尺度からなる共感性の尺度を作成したが、このうち IRI のファンタジー尺度と類似した内容のファンタジー・エンパシー尺度のみが生理的指標と有意な関係を示した。IRI のファンタジー尺度は、位置づけが難しいとして使われない場合もあるが、(架

空の) 他者の内部に入り込んだ気持ちになってその人の気持ちを想像したり、共有したりするという内容であり、empathy の本来の意味をよく表しているとも言える。

デイヴィスの IRI は日本語にも翻訳されているが(最新の翻訳は日道・小山内・後藤・藤田・河村・Davis・野村, 2017)、IRI と類似した次元を用いた別の尺度もある(たとえば登張, 2003)。IRI をもとに作成された登張(2003)の多次元的共感性尺度の共感的関心尺度は、他者指向的感情に加えて、他者との感情共有や共感的怒り(他者を苦しめる人への怒り)、向社会的動機を表す項目が含まれている。個人的苦痛尺度(登張, 2003)は、バトソンらの個人的苦痛概念というよりもむしろ、ホフマン(Hoffman, 1984, 1987, 2000/2001)の自己中心的共感(発達的に未分化な共感を表す。他者の苦痛に対して不安や動揺を示すこと)の概念を念頭に入れて作成された。気持ちの想像尺度(登張, 2003)には、視点取得や役割取得(他者の立場に立つこと)に加えて、敏感な感情認知を表す項目も含まれている。

なお、登張(2008)は上記の共感の次元に加えて、対象別・感情別共感という次元を検討し、家族との感情共有、友だちとの感情共有、他人との感情共有、喜びの共有、困窮の共有、悲しみの共有、怒りの共有の7下位尺度を作成した。この7尺度と多次元的共感性下位尺度(登張, 2003)と家族関係・友人関係・教師との関係尺度(浅川・尾崎・古川, 2003)との相関を調べると、共感的関心と気持ちの想像は家族・友達・他人との感情共有といずれも正の関係を示したのに対し、個人的苦痛とファンタジーは家族・友達との感情共有と有意な関係を示さず、他人との感情共有との関係は、ファンタジーは正の関係を示し、個人的苦痛は有意な関係を示さなかった(登張, 2008)。また、共感的関心と気持ちの想像、および家族・友達・他人との感情共有は家族関係・友人関係・教師との関係といずれも正の相関を示したが、個人的苦痛とファンタジーはこれらの3尺度と有意な相関を示さなかった(登張, 2008)。

感覚処理感受性または環境感受性について

近年、感覚処理感受性(または環境感受性)と呼ばれる気質的特性が注目されている。この特性が高い人のことをハイリー・センシティブ・パーソンと呼ぶが、こうした人々は人口の15~20パーセントというかなり高い確率で存在するという(Aron, 2010)。この特性は、環境や社会的刺激への感受性、感受性の高さ、刺激の微妙なところや小さな変化にも気づく、過剰な刺激に圧倒される等の特徴を示す生得的な単一の気質特性であり、同様の気質はほとんどの動物にも見出されるという(Aron & Aron, 1997; Aron, 2010; Aron, Aron, & Jagiellowicz, 2012)。動物には、食糧や交配の機会を見つけると、素早く力強く動くタイプと、状況の微妙な点を注意深く観察してから行動し、リスクを回避する行動戦略をとるタイプがあり、生物学者は、衝動的で果敢な多数派の前者と、敏感で用心深い少数派の后者を、大胆対シャイ、タカ派對ハト派などと呼んで区別している(Aron, 2010; Aron, Aron, & Jagiellowicz, 2012)。

感覚処理感受性にはさまざまな特徴がある。行動する前に深いレベルの情報処理を行う、過度に刺激を受けやすく、過剰に喚起されやすい、刺激が多すぎると圧倒される、感覚が鋭敏で、他者の気分気づきやすい、感情反応が強く、ポジティブな感情もネガティブな感情も強いなどである(Aron, 2010)。そのために抑うつや不安、シャイネスといった問題を抱えることも多いが、環境との相互作用があり、虐待などネガティブな環境からは悪い影響を受けやすく、ポジティブな環境からは良い影響を受けやすく、通常の支援的な環境からは多くのものを得るとも指摘され

ている (Aron, 2010)。感覚処理感受性が強い人は、入念で共感的、創造的で才能があり、芸術に対して情熱的などの特徴も見られるという (Aron, 2010)。

感覚処理感受性の神経基盤についての研究

感覚処理感受性の神経基盤を検討する研究が行われている。アセヴェドラ (Acevedo, Aron, Aron, Sangster, Collins, & Brown, 2014) は、成人 18 名を対象に、恋人と見知らぬ人の表情写真 (ポジティブ、ネガティブ、中立) を見せ、その間の脳活動をスキャンした。参加者はスキャン・セッションの 1 週間前にハイリー・センシティブ・パーソン尺度短縮版に回答していた。また、各表情写真を見る前に、文脈についての短い説明を受けた。どの条件でも、HSPS の得点は、注意とアクション・プランニングに関連する脳の活性化の増大と関連していた。幸せと悲しみの表情写真条件では、感覚処理感受性は気づきや感覚情報の統合、共感、アクション・プランニングに関わる脳領域の活性化と関連していた (Acevedo et al., 2014)。

ハイリー・センシティブ・パーソンが示す環境に対する敏感さや刺激への反応性の高さは、自閉症スペクトラム (ASD) や外傷後ストレス障害 (PTSD)、統合失調症 (SZ) 等で見られる症状と重複する場合があるため、感覚処理感受性 (SPS) とそれらの障害に関連する脳領域を比較する研究が行われた (Acevedo, Aron, Pospos, & Jessen, 2018)。それによると、報酬処理、生理的ホメオスタシスと痛みコントロール、自他処理と共感、気づき (awareness) と反省的思考、自己制御に関連する脳領域は、SPS のみで活性化がみられ、ASD と PTSD、SZ では不活性化を示し、違いが確認された (Acevedo et al., 2018)。

感覚処理感受性の測度

アロンら (Aron & Aron, 1997) は、感覚処理感受性を測定する 27 項目のハイリー・センシティブ・パーソン尺度を開発した。アロンら (Aron & Aron, 1997) は、ハイリー・センシティブ・パーソン尺度 (HTPS) は一次元構造であると結論づけたが、低感覚閾、易興奮性、美的感受性の 3 次元からなると主張されることもある (Smolewska, McCabe, & Woody, 2006)。高橋 (2016) は HTPS のオリジナル版を日本語に翻訳して調査を行い、その因子分析結果から 3 因子を抽出し、それをもとに低感覚閾、易興奮性、美的感受性の 3 下位尺度からなる 19 項目の Highly Sensitive Person Scale 日本語版 (HSPS-J19) を作成した。

日本語版の感覚処理感受性の尺度には、このほかハイリー・センシティブ・チャイルド尺度 (Plues, Assary, Lionetti, Lester, Krapohl, Aron, & Aron, 2018) を基に作成された日本語版青年前期用感受性尺度 (HSCS-A) (岐部・平野, 2019) と日本語版児童期用感受性尺度 (HSCS-C) (岐部・平野, 2020) もある。

感覚処理感受性と共感性、パーソナリティ変数および不適応との関係についての研究

ハイリー・センシティブ・パーソン尺度と共感性尺度やビッグファイブ尺度等との関連を検討する研究も行われている。タバクラ (Tabak, Gupta, Sunahara, Alvi, Wallmark, Lee, Fulford, Hudson & Chmielewski, 2022) はアメリカの大学生とオンラインで収集したサンプル計 1377 名

(女性 68%、年齢範囲 18-77 歳、平均年齢 25.76 歳 (SD=11.67) を対象に、自己報告の質問紙調査を行った。測度はハイリー・センシティブ・パーソン尺度 (HSPS; Aron & Aron, 1997)、Big Five Inventory (John & Srivastava, 1999)、IRI (Davis, 1983) を含む複数の共感性尺度、情動感染尺度 (Doherty, 1996)、社会的不安尺度 (LSAS; Liebowitz, 1987) 等である。HSPS を因子分析するとネガティブ感覚反応性 (NSR) とポジティブ感覚反応性 (PSR) の 2 因子が抽出された。NSR 因子の負荷量が高かったのは「強い刺激がわずらわしいですか」という内容の項目などで、PSR 因子の負荷量が高かったのは、「微細で繊細な香り・味・音・芸術作品などを好みますか」などの項目だった。この二つの因子得点と共感性やビッグファイブ尺度等との相関を調べると、NSR は IRI の個人的苦痛 ($r=.60$)、ネガティブ感情への情動感染 ($r=.40$)、神経症傾向 ($r=.61$)、社会的不安 ($r=.55$) 等との関連が強いが、その他の共感変数との関連は総じて低かった。PSR は IRI の共感的関心 ($r=.39$)、視点取得 ($r=.32$)、開放性 ($r=.46$) 等との間に有意な相関を示した。

マカリーら (McQuarrie, Smith, & Jakobson, 2023) は、305 名の成人 (平均年齢 20.1 歳 ; 81% は女性) を対象に、ハイリー・センシティブ・パーソン尺度 (HSPS; Aron & Aron, 1997) と IRI (Davis, 1983)、およびアレキシサイミア尺度 (Bagby, Parker, & Taylor, 1994)、感情虐待尺度 (Bernstein, Stein, Newcomb, Walker, Pogge, Ahluvalia, et al., 2003)、抑うつスクリーニング測度 (Kroenke, Spitzer, & Williams, 2001) 等の相互の関連を検討した。それによると、HSPS は IRI の共感的関心、視点取得、ファンタジー、個人的苦痛と正の相関を示し ($r_s=.29, .17, .37, .46$)、アレキシサイミアと児童期の感情虐待、抑うつとも正の相関を示した ($r_s=.27, .25, .42$)。共感性の次元とアレキシサイミアとの関係は、共感的関心と視点取得は負の相関 ($r_s=-.13, -.24$)、個人的苦痛は正の相関 ($r=.44$) を示し、ファンタジーは有意な相関を示さなかった。共感性の次元と感情的虐待および抑うつとの関係は、個人的苦痛のみ感情的虐待と正の有意な相関 ($r=.17$)、抑うつと正の有意な相関 ($r=.29$) を示した。この研究では、情動感染を誘発する課題¹⁾も行われ、感覚処理感受性が高い人は、感情刺激に対する反応が強いとともに、自分自身の感情も他者の感情も微妙に深く理解することが示唆された (McQuarrie et al., 2023)。なお、アレキシサイミアを持つ人は、内受容処理に欠陥があり (Brewer, Cook, & Bird, 2016)、自分の気持ちを同定し表現するのが困難で、概して共感性が低い。この特性には遺伝的要素もあるが、心的外傷や逆境による影響も指摘されている (Kopera, Zaorska, Trucco, Suszek, Kobyliński, Zucker, et al., 2020)。

考察

本稿では、共感の概念と次元について説明したうえで、文献研究を基に、感覚処理感受性の特徴について説明し、次元ごとに捉えた共感性の個人差と感覚処理感受性との関連を検討した。共感の個人差に関連しうる要因には、感覚処理感受性以外にもさまざまあると考えられるが、本稿では、感覚処理感受性との関係を中心に検討した。

ここでは、上で紹介した感覚処理感受性についての研究結果をもとに、1. 感覚処理感受性の神経基盤および他の障害との区別、2. 感覚処理感受性と共感性との関係、3. 感覚処理感受性および共感性の次元と不適応との関係に分けて考察する。

1. 感覚処理感受性の神経基盤および他の障害との区別

感覚処理感受性の神経基盤を検討する研究 (Acevedo, et al., 2014) からは、感覚処理感受性と共感性は共通する神経基盤を持つことが明らかになった。しかし、完全に重複するというわけではなく、感覚処理感受性に関連する生理的基盤は、環境刺激の処理とそれに対応する独自の戦略を果たすのが主要な目的であるのに対し、共感に関連する生理的基盤は、他者との絆を深めたり、他者をより深く理解したりすることに寄与し、両者の機能は若干異なるのではないかと推測した。向社会的行動は感覚処理感受性と有意な関連を示したものの、その関係は強くなかった (Tabak et al, 2022)。また、感覚処理感受性は自閉症スペクトラム (ASD) や外傷後ストレス障害 (PTSD)、統合失調症 (SZ) と重複する症状を示す場合があるが、それぞれの障害と関連する脳領域について調べると違いがみられ、各障害は区別できることが明らかになった (Acevedo, et al., 2018)。

2. 感覚処理感受性と共感性との関係

感覚処理感受性と共感性の次元や他の変数との関係を検討した研究のうち HSPS フル尺度を用いた研究 (McQuarrie et al., 2023) では、HSPS は IRI の共感的関心、視点取得、ファンタジー、個人的苦痛と正の相関を示し、個人的苦痛との相関が最も高く、次にファンタジー、共感的関心の順で、視点取得との相関は .20 未満であった。HSPS 尺度を因子分析し、ネガティブ因子とポジティブ因子に分けて分析した研究 (Tabak, et al., 2022) からは、ネガティブ因子は個人的苦痛、ネガティブ感情への情動感染、神経症傾向と正の比較的強い相関を示し、ポジティブ因子は共感的関心、視点取得、開放性と正の関係を示すことが明らかとなった。共感性の次元や共感関連変数のうち、感覚処理感受性は個人的苦痛との関係が顕著であることが示されたと言える。情動感染との関連も比較的顕著だった。情動感染は感情的共感と認知的共感の両方を下支えするとの指摘もある (McQuarrie et al., 2023)。情動感染と個人的苦痛は、共感性のプリミティブな要素ないし形態と捉えることもできる。感覚処理感受性はプリミティブな形態の共感性と関連が深いということになる。ファンタジーとの関係も比較的高かった。

3. 感覚処理感受性および共感性の次元と不適応との関係

HSPS のフル尺度が分析に用いられていたマカリーらの研究 (McQuarrie et al., 2023) では、不適応の指標としてアレキシサイミアと抑うつ、虐待が用いられていた。虐待は子どもが生後経験する、不適応をもたらすようなネガティブな経験である。感覚処理感受性と個人的苦痛はアレキシサイミア・抑うつ・虐待と正の関係にあるのに対し、共感的関心と視点取得はアレキシサイミアとは負の関係にあり、抑うつ・虐待とは有意な関係になかった。ファンタジーはアレキシサイミア・抑うつ・虐待のいずれとも有意な関係を示さなかった。感覚処理感受性は環境との交互作用があり、虐待などネガティブな環境からは悪い影響を受けやすく、ポジティブな環境からは良い影響を受けやすいとも指摘されている (Aron, 2010)。感覚処理感受性の傾向を持つ人が虐待などネガティブな環境を経験していると、アレキシサイミアや抑うつなどの不適応症状を示す可能性が高くなるのかもしれない。環境因子と不適応の間には交互作用が想定されるので、ネガティブな環境因子の存在がある場合とない場合で分けて分析すると、因果関係がつかみやすくなると思われる。なお、下位尺度も用いて、HSPS 下位尺度とこれらの変数との関係を検討すると、さらに明確な関係が明らかになるかもしれない。

一方、感覚処理感受性のネガティブ因子とポジティブ因子が用いられたタバコらの研究 (Tabak et al, 2022) では、感覚処理感受性のネガティブ因子は、不適応と関連すると考えられる神経症傾向や社会的不安と正の関係を示すとともに、個人的苦痛、ネガティブ感情への情動感染と強い関係にあることが明らかとなった。ネガティブ因子とポジティブ因子に分けた分析は、結果も分かりやすく、有効だと考えられる。

日本で用いられている低感覚閾、易興奮性、美的感受性の3因子を用いて共感性関連変数との関係を検討した研究を見つけることはできなかった。2因子解と3因子解を対照すると、低感覚閾と易興奮性の項目はネガティブ因子、美的感受性の項目はポジティブ因子に含まれていたが、3因子解をもとに作成された尺度は全19項目で、HTPSのフル尺度27項目のうち8項目は使用されていなかった。どの尺度を用いるのが有用か検討する必要がある。

ポジティブな環境因子がある場合は、感覚処理感受性の傾向があっても不適応にならないことも示唆されている。共感的で温かい心理療法や支援など、ポジティブな環境因子の効果を検討することもできるだろう。対象別共感尺度や対人的適応尺度を用いた研究 (登張, 2008) では、共感的関心と気持ちの想像は親や友だちとの感情共有と対人的適応との関係が正であるのに対し、感覚処理感受性との関係が強い個人的苦痛とファンタジーは、これらの変数との間に有意な関係がみられなかった。因果関係はよくわからないが、感覚処理感受性が高い傾向を持つ人でも、家族や友だちとの感情共有の経験を持つと、それはポジティブな環境因子となり、不適応を示すことが減るのではないかと推測した。そうした検討もする価値がある。

感覚処理感受性は個人的苦痛との関連が強いことが明らかとなった。他者のネガティブな感情への共感共感疲労をもたらすとか、ネガティブ感情を増加させるという指摘もある (Singer & Klimecki, 2014; Zaki, 2020)。こうした所見に個人的苦痛や感覚処理感受性が関連している可能性もある。なお、感覚処理感受性と強い関係があることが分かった個人的苦痛は、アメリカのデータでは発達とともに減少する傾向があるのに対し (Davis & Franzoi, 1991)、日本のデータでは学校段階による減少傾向がみられなかった (登張, 2003)。共感性の他の下位尺度と比べて状態共感との関係が低い傾向もみられた (Tobari & Oshio, 2023)。その個人的苦痛がアレキシサイミアや抑うつ、虐待と有意な関係があるという知見 (McQuarrie et al., 2023) は重大である。個人的苦痛については、今後さらに検討する必要がある。

共感性と感覚処理感受性との関連を検討する研究はこのほかにもあると思われるし、今後、さらに増えるだろう。状態共感の測度を用いた研究はまだ少ないが、そうした研究が何かをもたらすかもしれない。感覚処理感受性は共感性の個人差に関連している可能性がある。しかし、どのように関連しているかという問題は、まだ十分解明されておらず、今後も検討すべき重要なテーマであると考えられる。先行研究を基に、どのような変数を用いるか、どのような仮説を立てるか、どのように分析するかをよく検討することが重要である。

引用文献

- Acevedo, B. P., Aron, E. N., Aron, A., Sangster M., Collins, N., & Brown, L. L. (2014). The highly sensitive brain: an fMRI study of sensory processing sensitivity and response to others' emotions. *Brain and Behavior, 4*, 580–594. <https://doi.org/10.1002/brb3.242>
- Acevedo, B., Aron, E., Pospos, S., & Jessen, D. (2018). The functional highly sensitive brain: a review of the brain circuits underlying sensory processing sensitivity and seemingly related disorders. *Philosophical*

- Transactions. The Royal Society B*, 373: 20170161. <https://doi.org/10.1098/rstb.2017.0161>
- Aron, E. N. (2010). *Psychotherapy and the highly sensitive person*. New York: Routledge.
- Aron, E. N. & Aon, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345–368. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.73.2.345>
- Aron, E. N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. (2012). Sensory processing sensitivity: A review in the light of the evolution of biological responsiveness. *Personality and Social Psychology Review*, 16, 262–282. <https://doi.org/10.1177/1088868311434213>
- 浅川潔司・尾崎高広・古川雅文 (2003). 中学校新入生の学校適応に関する学校心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, 23, 81–88.
- Bagby, R. M., Parker, J. D., & Taylor, G. J. (1994). The twenty-item Toronto Alexithymia Scale-I: Item selection and cross-validation of the factor structure. *Journal of Psychosomatic Research*, 38, 33–40. [https://doi.org/10.1016/0022-3999\(94\)90006-X](https://doi.org/10.1016/0022-3999(94)90006-X)
- Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 706–718.
- Bernstein, D. P., Stein, J. A., Newcomb, M. D., Walker, E., Pogge, D., Ahluvalia, T., et al. (2003). Development and validation of a brief screening version of the childhood trauma questionnaire. *Child Abuse and Neglect*, 27, 169–190. [https://doi.org/10.1016/S0145-2134\(02\)00541-0](https://doi.org/10.1016/S0145-2134(02)00541-0)
- Brewer, R., Cook, R., & Bird, G. (2016). Alexithymia: A general deficit of interoception. *Royal Society Open Science*, 3: 150664. <https://doi.org/10.1098/rsos.150664>
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113–126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. New York: Brown & Benchmark. (デイヴィス, M. H. 菊池章夫訳 (1999). 共感の社会心理学：人間関係の基礎 東京：川島書店)
- Davis, M. H. & Franzoi S. L. (1991). Stability and change in adolescent self-consciousness and empathy. *Journal of Research in Personality*, 25, 70–87.
- Davis, M. H., Hull, J. G., Young, R. D., & Warren, G. G. (1987). Emotional reactions to dramatic film stimuli: The influence of cognitive and emotional empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 126–133.
- Doherty, R. W. (1996). The emotional contagion scale: A measure of individual differences. *Journal of Nonverbal Behavior*, 21 (2), 131–154. <https://doi.org/10.1023/A:1024956003661>
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Schaller, M., Miller, P., Carlo, G., Poulin, R., Shea, C., & Shell, R. (1991). Personality and socialization correlates of vicarious emotional responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 459–470.
- Eisenberg, N., Guthrie, I. K., Cumberland, M., Murphy, B. C., Shepard, S. A., Zhou, Q., & Carlo, G. (2002). Prosocial development in early adulthood: A longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 993–1006.
- Feshboch, N. D., & Roe, K. (1968). Empathy in six-and seven-year-olds *Child development*, 39, 133–145.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons, Inc. フリッツ・ハイダー 大橋正夫訳 (1978). 対人関係の心理学 誠信書房
- 日道俊之・小山内秀和・後藤崇志・藤田弥世・河村悠太・Davis, Mark H.・野村理朗 (2017). 日本語版対人反応性指標の作成 心理学研究, 88, 61–71.
- Hodges, S. D. & Wixwatt, M. (2022). No need to take what you already have: perspective taking's effect on empathic concern for low-need targets. *The Journal of Social Psychology*, 162, 41–56. <https://doi.org/10.1080/00224545.2021.1988499>
- Hoffman, M. L. (1984). Interaction of affect and cognition in empathy. In C. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc (Eds.) *Emotions, cognition, and behavior* (pp.103–131). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoffman, M. L. (1987). The contribution of empathy to justice and moral judgment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.) *Empathy and its development* (pp. 47–79). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and Moral Development*. Cambridge: Cambridge University Press. (ホフマン, M. L. 菊池章夫・二宮克美訳 (2001). 共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで 東京：川島書店)
- Hume, D. (1739/2000). *A treatise of human nature*. Oxford: Oxford University Press. (ヒューム, D. 石川徹・中

- 釜浩一・伊勢俊彦訳 (2011). 人間本性論 第2巻 情念について 東京：法政大学出版局；伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳 (2012). 人間本性論 第3巻 道徳について 法政大学出版局)
- John, O. P. & Srivastava, S. (1999). The Big Five trait taxonomy: History, measurement, and theoretical perspectives. In L. A. Pervin, & O. P. John (Eds.) *Handbook of personality* (pp.102-138). New York: The Guilford Press.
- Johnson, D. A., Knight, D. N., & McHugh, K. (2021). Score reliability and validity evidence for State-Interpersonal Reactivity Index: A multidimensional assessment of in-session counselor empathy. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, 54, 24-41. <https://doi.org/10.1080/07481756.2020.1745652>
- 岐部智恵子・平野真理 (2019). 日本語版青年期前期用敏感性尺度 (HSCS-A) の作成 パーソナリティ研究, 28, 108-118.
- 岐部智恵子・平野真理 (2020). 日本語版児童期用敏感性尺度 (HSCS-C) の作成 パーソナリティ研究, 29, 8-10.
- Kopera, M., Zaorska, J., Trucco, E. M., Suszek, H., Kobylinski, P., Zucker, R. A., et al. (2020). Childhood trauma, alexithymia, and mental states recognition among individuals with alcohol use disorder and healthy controls. *Drug Alcohol Depend*, 217: 108301. <https://doi.org/10.1016/j.droalcddep.2020.108301>
- Kroenke, K., Spitzer, R. L., & Williams, J. B. (2001). The PHQ-9: Validity of a brief depression severity measure. *Journal of General Internal Medicine* 16, 606-613.
- Liebowitz, M. R. (1987). Social phobia. *Modern Problems Pharmacopsychiatry*, 22, 141-173. <https://doi.org/10.1159/000414022>
- Lipps, T. (1907). Das Wissen von fremden Ichen. *Psychologische Untersuchungen*, 4, 694-722.
- (Lipps, T. Edited and with an introduction by Burns, T. A. Tranlation by Cavallaro, M. (2018). The knowledge of other egos. In R. K. B. Parker & I. Quepons (Eds.) *The New Yearbook for Phenomenology and Phenomenological Philosophy*. Volume XVI (pp.261-282). New York: Routledge).
- McDougall, W. (1908). *An introduction to social psychology*. London: Methuen.
- McQarrie, A. M., Smith, S. D., & Jakobson rnsml S. (2023). Alexithymia and sensory processing sensitivity account for unique variance in the prediction of emotional contagion and empathy. *Frontiers in Psychology*, 14: 1072783. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2023.1072783>
- Murphy, L. B. (1937). *Social behavior and child personality. An exploratory study of some roots of sympathy*. New York: Columbia University Press.
- Plues, M., Assary, E., Lionetti, F., Lester, K., Krapohl, E., Aron, E. N., & Aron, A. (2018). Environmental sensitivity in children: Development of the Highly Sensitive Child Scale and identification of sensitivity groups. *Developmental Psychology*, 54, 51-70.
- Singer, T. & Klimecki, O. M. (2014). Empathy and compassion. *Current Biology*, 24 (18), R875-878.
- Smolewska, K. A., McCabe, S. B., & Woody, E. Z. (2006). A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory processing sensitivity and their relation to the BIS/BAS and "Big Five". *Personality and Individual Differences*, 40, 1269-1279.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol.4 (pp.271-314). New York: Academic Press.
- Stotland, E., Mathews Jr., K. E., Sherman, S. E., Hasson, R. O., & Richardson, B. Z. (1978). *Empathy, fantasy and helping*. Volume 65 Sage Library of Social Research. Beverly Hills: Sage Publications.
- Tabak, B. A., Gupta, D., Sunahara, C. S., Alvi, T., Wallmark, Z., Lee, J., Fulford, D., Hudson, N. W., & Chmielewski, M. (2022). Environmental sensitivity predicts interpersonal sensitivity above and beyond Big Five personality traits. *Journal of Research in Personality*, 98: 104210. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2022.104210>
- 高橋亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本語版 (HSPS-J19) の作成 感情心理学研究, 23, 68-77.
- Titchener, E. (1909). *Elementary psychology of the thought processes*. New York: Macmillan.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 登張真稲 (2005). 共感喚起過程と感情的結果、特性共感の関係—正の類似度、心理的重なりの効果— パーソナリティ研究, 13, 143-155.
- 登張真稲 (2008). 中学1年生の共感と対人的適応—その関連性と対象別・感情別共感の次元— 青年心理学研究, 20, 25-40.
- 登張真稲・大山智子・木村あやの (2010). 中学1年生の共感における役割取得と並行的感情反応、他者指向的反応、感情理解の関係 パーソナリティ研究, 19, 122-133.

- Tobari, M. & Oshio, A. (2023). Measurement of individual differences in state empathy and examination of a model in Japanese University students. *Psych*, 5 (3), 928-947. <https://doi.org/10.3390/psych5030061>
- Zaki, J. (2020). *The war for kindness: Building empathy in a fractural world*. New York: Broadway Books.

脚注

- 1) 参加者に何らかの感情を表す10種の視覚的フィルム・クリップを見せ、各クリップについて、9つの感情をどのくらい強く感じたかを6件法で答えるよう求めた。また、自分の感情がクリップの中の主な人物の感情とどのくらい一致していると思うかについても、6件法で答えるよう求めた。